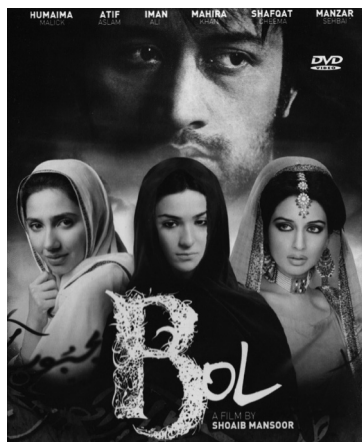


【パキスタン】
スナ派とシーア派を
リシュター
繋ぐ糸縁
 ——イスラーム社会の声を聞く

村山和之

カラーチャーそしてペシャーワルを大きく引き離し、パキスタンで最も大きな大衆映画産業は、パンジャーブ州都ラホールを拠点としたロリウッド映画界で営まれている。名称はハリウッドから肖ったものだ。しかし、二〇一二年度のアジアフォーカス・福岡国際映画祭で観客賞を受賞したシヨエーブ・マンスール監督作品『BOL』声をあげる』は、ロリウッドはおろか、どこの映画界にも属さない自主制作によるものである（写真）。

マンスール監督は、一九八〇年代のパキスタン・ポップ



写真『BOL ～声をあげる～』DVD ジャケット写真 前列中央：ザイナブ、同右：ミーナ、前列左：アーイシャ、後：ムスタファア

ス音楽界の金字塔を打ち立てたバンド、ヴァイタル・サインズ (Vital Signs) の作詞・作曲・プロデュースをつとめ、テレビでも良質の映像作品を創り出してきたマルチャレントといえる鬼才である。しかも、誰も彼の顔を知らない。正確に言えば、メディアに顔を明かしていない。

これは、彼が創り出す映画の世界観と彼を葬ろうとする在野の宗教・政治観が相容れないことから、自らの命を守る自衛手段なのである。どこの映画産業にも直接関わらず、自分だけの人脈と金脈と命を懸けて、パキスタン社会に対するメッセージを映画で伝えるという生き方を、マンスール監督は選んだだけだ。

パキスタンの国語であるウルドゥー語による社会派ドラマ映画『BOL』声をあげる』は、二〇一一年六月二四

日にパキスタンで封切られた。国産映画では大変珍しいことだが、封切り後の一週間であつたりと国内興行収入記録を塗り替えてしまった。具体的な数字をあげれば、ムンバイ映画界ボリウッドの大スター、シャー・ルク・ハーン主演の『マイネーム・イズ・ハーン』が持っていた一三〇〇万ルピーに対してこの作品は六二〇〇万ルピーを稼ぎ出した。八月三十一日には、インド、アメリカ、カナダ、イギリス、アラブ首長国連邦そしてオーストラリア等、南アジア系移民の多い諸国でも公開された。

アジアフォークス・福岡国際映画祭には、マンスール監督と親交の深かった麻田豊氏（元東京外国語大学ウルドゥー語教官）の強い奨めによつて、監督は出品を決意されたという。そして、前作『神に誓つて』（二〇〇八）以来二度目となる同祭「観客賞」受賞、さらに一〇月には東京のインディアン・フィルム・フェスティバル・ジャパンでも公開された。

『BOL』声をあげる』

——因習社会からの女性の覚醒と自立

そのマンスール監督が選んだ本作品のテーマは、今まで誰も手を付けられなかった、パキスタン因習社会からの女性の覚醒と自立である。

一九四七年、インドとパキスタンが分離独立し、デリー

からパキスタンへ移ってきた伝統医薬師（ハキーム）の一家が、デリーと似たラホールの旧市街に薬局を開いた。代は替わり、後を継いだ家長もハキームとして店を続けるが時代の流れに取り残され、家族は貧困に苦しんでいる。しかし、跡取りの息子が生まれるまで盲目的に子どもを生まれ続ける信仰深い絶対君主の父親は、夫に服従する妻一人、娘たち五人姉妹の困窮ぶりにも打つ手がない。彼らはスナナ派の信者である。

こんななか、やつと生まれた息子サイフイーは、性同一性障害（ふたなり）であつたため、発覚を恥とする父親によつて戸籍は与えられず、学校にも行けず屋敷内で姉達に愛されて育てられる。そんな父親の姿を見て、家族計画もなく出産は出来ないと目覚めたが故に離婚されて実家に戻ってきた長女ザイナブは、旧習のシンボルである父親と対立し、口答えして正論を唱えるたびに暴力を振るわれる。貧しくても現実を直視せず、信仰が厚ければ神が助けてくれると心から信じて開き直る父親。彼は妻に合計一四人の子を妊娠させ、死産が八人、生まれて無事育つた子が彼ら六人であった。

一方、屋上でつながる隣家は、父親が学校教師、息子ムスタファーは医大生でロック歌手、教育と人権を重視するシニア派の家庭である。ハキームの次女アーイシャは幼馴染のムスタファーにギターを習い恋仲になり、時々デート

しては外の世界を知ってゆく。ムスタファアの嫁にアーイシャを、という隣家の申し出も、「シアア派はだめだ」と一蹴し、慌てて結婚相手を決めてしまう。

ある日、ザイナブに相談されたムスタファアのはからいで、父に隠れてトラックの装飾画描きのアルバイトをしていたサイフィーが職場の男たちに陵辱される。助けて送ってくれたふたなりの姐さんにも「その体じゃ、将来は遊女屋の踊り子しかない」と言われた、と泣くサイフィー。その話を聞いてショックをうけた父親は、ガリーブ詩集をめぐって占い、存在しない自分の息子を殺す。警察に賄賂を渡して助かる父親はいよいよ経済的に困窮し、薬の街頭販売にも行き詰まり、屈辱を覚えながらも遊女屋の元締めサッカー・チョウドリーに大金を借りる。

借金の返済方法は「娘を生ませる能力」の又貸しだった。娘が生まれれば踊り子兼娼婦にするこの家では女兒こそが必要だった。コラン占いに従って嫌嫌ながらも、美しい遊女でサッカーの孫女ミーナと密かに結婚し責任を果たす父親。しかし、生まれた娘の未来は娼婦であることは決まっている。赤児をこの家から救い出そうとした瞬間を見つかり、怒ったサッカーに叩き出される父親。

ザイナブは、父親の不在中に母親に不妊手術を受けさせたり、ムスタファアとアーイシャを結婚させるなど、命をかけて家族を守っていた。

ある夜ヴェールを被ったミーナが、赤児を父親の家に届けて姿を消す。父親の重婚に傷つき、翌朝には家を出ていこうとする母娘たち。その夜中に遊女屋のサッカー一味が乗り込んできた。赤児をめぐって右往左往するなかで、約束された未来があまりに不憫だとして父親はその子を殺そうとする。阻止しようとしたザイナブは、はずみで父親を殺してしまった。

ザイナブは終審まで一言も話さなかった。絞首刑が決まったとき、義弟となったムスタファアに「あなたが話してくれたことで、この社会で同じように苦しむ人たちが少しでも救われるかも知れない。話してくれ（ボールー）」と説得され承諾する。深夜の刑務所の絞首台に設えられたマイク、下に群がる同時中継するマスコミ。「裁判中に私が事実を話したら、命乞いのために嘘の話をでっち上げていると誰もが考えられると思って今まで何も話さなかった。今はもう、死が決まった今はもう、命乞いと思われる心配もないし話しておきたい」とザイナブは話し始める。そして「なぜ人を殺すことは罪であり、人を生むことが罪ではないのか？」を最期の言葉として残し、処刑された。

『BOLE 声をあげる』のなかのイスラーム

この映画を通してパキスタン社会を覗こうとすると、いったい何が見えるだろうか。

まず、気になるのが同じイスラーム教徒間の宗派対立だ。純粹なウルドゥー語と敬虔なスンナ信徒であることを誇り、清貧を可しとする家長のハキームが、なぜシーア派の人間を毛嫌いしているのだろうか。

その原因のひとつは、預言者ムハンマドの血筋を尊重し崇拜する、具体的には彼の娘婿アリーを聖人崇拜の対象としている点があげられる。アッラー以外に信仰対象があつてはいけないのだ。さらに見つめれば、シーア派信者は血筋を重んじる職能集団（職人、音楽家、舞踊家、娼婦）など、社会的地位が低い階層に多く見られる。しかもシーア派には迫害を逃れる際に一時婚を許容する習慣があり、信仰の側面として一時的に夫婦関係を結べる点が売春・買春行為を正当化する論点となってきた背景がある。

デリー・イスラーム文化の後継者を自負している節が見え隠れするハキームは、悲しいかなラホールに地縁は持たない無縁者である。少数派としてコミュニティの結束が強いシーア派は、ハキームから見れば忌々しい存在なのだ。しかも、特殊な仕事を一手に担っているため、経済的にも優位にある。映画の中では、隣家の校長と遊女屋の元締めがシーア派の両極を代表していた。

校長の息子ムスタファーは、伝統医薬師ハキームと真つ向から対立する西洋医学のドクターを目指し、ガチガチのスンナ派が好まない「楽隊屋」（ロック歌手ではあるが）

をやっている。

一方、遊女屋の元締めサツカーは、伝統的に踊り子や娼婦による風俗産業を担ってきたカンジャル (Kanjhar) と呼ばれるアウト・カーストに属する。カンジャルは元ヒンドゥー教徒で、イスラームに改宗する際に家業と血筋の系譜を尊ぶシーア派を選んだ集団である。パンジャブ地方では、伝統的民俗音楽を担う職能楽師集団は、今も実際にシーア派に属する例が多い。

ハキームの「正統スンナ派」としてのプライドは、職業を脅かされ、娘を結果的に奪われ、売春で得た汚い札をカンジャルの子どもへのコーラン教師を努めた対価として受け取るなかで崩壊してゆくが、それでもアッラーが見守っていてくれると思い、自分を変えてまで周囲とは交わろうとしない。そのつけは、彼が最も忌み嫌うシーア派の一時婚に自らが囚われる悲劇となって支払われる。結果的に大差はないが、一時婚ではなく第二夫人を娶るという形に固辞せざるを得なかった、ハキームの心情を誰がはかれよう。

ハキーム（デリー、ウルドゥー語、スンナ派）、ムスタファー（ラホール、ウルドゥー語、シーア派）、そしてサツカー（ラホール、パンジャビー語、シーア派）。この三人がそれぞれインドからの移民、ラホール地縁のシーア派上層、ラホール地縁のシーア派下層社会を象徴している。

ではスンナ派とシーア派は、水と油のように交わずに生きてきたのだろうか。両者を繋ぐ糸はないのだろうか。

本編ではカットされたシーンがDVDには残されているが、ハキームとサッকারの面白い対話場面がある。ハキームが、ラホールでの守護聖者ダーター・ガンジ・バフシユの聖墓に参詣に行くところを、サッカーが冗談のように真顔で止める。ハキームが訳を尋ねると「あなたは生まれてくる子に男児を願い、あつしは女兒をお願ひしてます。ダーター様が困っちゃうでしょう？」とサッカーは答えるのだ。二人とも聖者の呪力（バラカ）にご利益を願うことを可しとしていることがわかる。

この場面は、イスラーム神秘主義（スーフィズム）と民間信仰、聖者崇拜が渾然一体となった民衆のスーフィズムがパキスタン社会では超宗派であることを表している。聖者廟を中心とした現世利益を目的とした聖者信仰にスンナ、シーアの違いによる対立はないのだ。聖者の力を通してアッラーから恩寵をいただくことはよいことだとみな考えている。

これこそインドもパキスタンもなく、古インド世界の深層から脈々と続いてきた民衆の祈願追求のかたちである。願をかけるとき、お神籤を結ぶように聖者廟に糸を結ぶ。

身分の上下も宗派の相違もなく、民衆の幸福希求の本音を受け入れることができるのが、聖者と民衆が織りなす「水

清からざる」スーフィズムなのだ。

南アジア・イスラーム社会の声を聞く

ウルドゥー語タイトルの「話せ／声をあげる」（ボール／Bol / speak out）は、預言者ムハンマドが洞窟に籠って瞑想している時、大天使ガブリエル（ジーブリール）がやってきて、怯えるムハンマドに、神の言葉をアラビア語で「話せ」（クル／Qul）と何度も命令した場面を思わせる。

マンスール監督は、ザイナブ、ハキーム、ムスタファー、そしてサッカーの四柱を軸にパキスタン旧習社会の諸相をテロリスト然として揺らし、その根の深さと複雑さを提示してみせた。

映画のラストシーンでは、ザイナブの死後、残された母娘が自宅で小さな食堂を開いて自活し始め、それが徐々に軌道に乗りザイナブズ・カフェという有名レストランにまで発展させる。ハキームが妻を労って言った唯一の言葉「お前の作る料理は美味すぎる」が遺言のように思い起こされた。生きるために外の世界で働く女性が売るサービスの形は、因習の枠を超え、勇気をもって発想を変え、行動することで新しい可能性となりうる事が描かれた。

この場面の挿入歌が「できるのさ、可能だったのさ」と歌うなか、男客の同伴（？）としてカフェを訪れたミーナ

が、幸せに成長した自分の幼い娘を注視しながら沈黙して店の中へ消えてゆく。ミーナはどんな声を上げようとしたのか。

パキスタン人に見てもらったためにこの映画を作った、というマンスール監督のメッセージは、果たしてどれほどの人に「話す」契機を与えて、人を救済したのだろうか。これだけは数字が出ていないので、今はまだ誰もわからない。

●参考文献

景山咲子（二〇一）「ショエーブ・マンスール監督『BOL』声をあげる」で二度目の福岡観客賞『パキスタン』
日本・パキスタン協会、第二四四号、二二―一八頁。

映画リスト

『BOL』声をあげる』……①ヒト（話せ）、②ショエーブ・マンスール、③二〇一一年、④パキスタン、⑤ウルドゥー語、パンジャービー語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭（二〇一）、インディアン・フィルム・フェスティバル・ジャパン（二〇一）。

『神に誓って』……①ヒト、②ショエーブ・マンスール、③二〇〇七年、④パキスタン、⑤ウルドゥー語、英語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭（二〇〇八）。

『マイネーム・イズ・ハーン』……①My Name Is Khan、②カラン・ジョーハル、③二〇一〇年、④インド、⑤英語、ヒンディー語、⑥DVD販売。

著者紹介

①氏名……村山和之（むらやま・かずゆき）。

②所属・職名……中央大学総合政策学部・非常勤講師（ヒンディー・ウルドゥー語）。

③生年・出身地……一九六四年、千葉県外房。

④専門分野・地域……パキスタン・パロチスタン文化研究。

⑤学歴……和光大学人文学専攻科（芸術学専攻）、パキスタン国立パロチスタン大学文学部言語学科ブラーフイー語修士課程中退。

⑥職歴……和光大学人文学部芸術学科・表現学部総合文化学科（非常勤講師）、千葉大学文学部日本文化学科（非常勤講師）、立教大学現代心理学部映像身体学科（非常勤講師）。

⑦現地滞在経験……パキスタン・パロチスタン州、一九八九―一九九一年（調査・副手）、一九九二―一九九五年（留学）、一九九六―一九九九年（調査・非常勤講師）。

⑧研究方法……パロチスタンに関する先行研究がほとんどないのでフィールドでの経験がすべてである。参与観察を行っている。

⑨所属学会……日本南アジア学会、聖者の宮廷講（共同主宰）。

⑩研究上の画期……九・一一事件を受けてアメリカ合衆国がパキスタン経由でアフガニスタンを攻撃したこと。

⑪推薦図書……梅棹忠夫『文明の生態史観』（中央公論社、一九六七年）。

⑫推薦する映画作品……『注目すべき人々との出会い』（ピーター・ブルック監督、一九七九年、イギリス）。